
眼鏡＜短編集＞

月姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眼鏡＜短編集＞

【Nコード】

N7282K

【作者名】

月姫

【あらすじ】

東京の大学に進学した平次と大阪の大学を選んだ和葉。遠恋になった2人とそれを見守る新一と蘭。以前投稿した「眼鏡」と同一設定での短編集です。全16話。

東京駅にて（和葉）（前書き）

過去作ばかりですので、既にご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが。また、都合により関西弁は会話等必要最低限の所に限定しておりますので、ご了承ください。

東京駅にて（和葉）

手が離れるこの瞬間が、一番嫌い。

夕方の駅は、いつもと同じように混んできた。

忙しそうに足早に先を急ぐ人。

人待ち顔で携帯を握り締めている人。

あちこちから聞こえてくる話し声や、案内を告げるアナウンス。
出発を知らせるベルの音。

この1年ですっかり見慣れた光景。

でも、見たくはない光景。

「18時20分発ののぞみやったよな？」

「……うん」

平次に手を引かれるようにして、新幹線のホームへ向かう。

平次の右手には、アタシの荷物。

2泊分の着替えが入った小ぶりのボストンバッグが、ここはアタシの居場所じゃないと主張してる。

ここは、時々訪れるだけの場所。

わかってるけど、いつも悲しくなる。

「何号車や？」

「……5号車」

アタシが乗る新幹線は、もうとっくに乗車が始まっている。

出発までは、あと数分。

だけど、ギリギリまで一緒にいたくて、乗車口の手前で立ち止まった。

空はまだ明るい。

新大阪行きの終電までは、まだ3時間くらいある。

けれど、平次はこの時間より遅い新幹線は絶対に許してくれない。

それは、アタシを心配してくれてるからだってわかってる。

この時間なら10時頃には家に帰れるけど、最終の新幹線だと家に着く頃には日付が変わってしまうから。

でも、もう少し……あと1時間でもいいから、一緒にいたい。

何度となくそうねだって、最後にはケンカまでしたけど、これだけは譲ってくれなかった。

「忘れモンないか？」

「……うん」

「向こう着いたら、ケチらんとタクシー使えや？」

「……うん」

「メールも忘れんなや？」

「……うん」

別れ際のいつもの会話。

顔を見たらもっと悲しくなりそうで、いつものように俯いたまま荷物を受け取った。

『18時20分発、新大阪行きのぞみ……』

スピーカーから、発車を告げるアナウンスが流れた。

この後続くベルが鳴り終われば、また暫くは平次に会えない。

繋いだ右手にぎゅっと力を込めると、平次もアタシの手を強く握り締めてくれた。

「氣いつけてな」

平次に促されて、新幹線に乗る。

離れた掌から平次の温もりが消えていくのが寂しくて、慌てて右手を握った。

この瞬間が、一番嫌い。

平次がいない日常に戻らなければならない事を、はっきりと突きつけてくるから。

ドアが閉まる。

ホームに残った平次が、左手をポケットに入れたまま軽く右手を上げた。

平次の手の温もりを逃がすまいと握り締めた右手。

バッグの持ち手に残った平次の体温を消したくなくて、離せないでいる左手。

手を振る事なんて出来なくて、アタシはいつものように、ただ平次を見つめているだけ。

それもほんの僅かの間。

新幹線がゆつくりと動き始めると、すぐに平次の姿は見えなくなつた。

東京駅にて（平次）

新幹線の白い車体が、西に向かってゆっくりと加速していく。
最後に残るテールライトの光が景色に溶け込むと同時に、駅の喧騒が蘇ってきた。

いや、蘇ってきた……というのは正しくない。
ただ、オレの耳に入っていなかったただけだ。

一つ息をついて、西に背を向ける。
ブルゾンのポケットに突っ込んだ左手もそのままに、ホームを後にした。

東京に進学して1年。

『もう』1年なのか、『まだ』1年なのか。

普段は気にも留めない事なのに、こんな時はやけに気になる。

こんな時。

——和葉を見送る時。

ほんの1年前までは大阪に帰る和葉の隣には必ずオレがいて、彼女が乗った新幹線を『ホームから見送る』なんて事はなかった。
どこに出掛けたとしても、いつだって一緒に同じ土地に帰った。
だから、初めのうちは酷く違和感があった。

和葉を『見送る』という事に。

この1年で、それにも随分と慣れてきたけれど。

アパートへと戻る電車の中、空いた右手で携帯を開ける。
探すまでも無く出てくる和葉のアドレスに、いつものように『寄り道すんなや』と一言だけのメールを送って、ポケットに戻した。

和葉からの返事が来るのは、いつも大阪に着いてから。

普段ならメールを送ればすぐに返事があるのに、この時だけは返事が遅れる。

その理由にも何となく見当がつく。

恐らくは、いつもは左手で携帯を操る事の多いオレが、手が塞がっているわけでもないのに右手でメールを打つと同じ理由だろう。

——もう残っているはずもない温もりだけれど、それでも手放したくないから。

窓の外、見慣れた景色が飛ぶように流れて行く。

幾つかの駅を過ぎて、電車は着実に、今オレが住んでいる場所へと近づいている。

『和葉のいない日常』を過ごす場所へ。

東京駅の地下街で、いつものように時間合わせのお茶をした。

段々と和葉の口数が減って、殆ど口をつけていないコーヒーがすっかり冷めた頃、いつものようにポケットの中で携帯が震えた。

携帯のアラームに急き立てられるように店を出て、いつものように右手で和葉の荷物を取り上げた。

和葉の手を取るのは、いつも左手。

その無意識の行動は、オレが未だにあの時の事を引き摺っている証拠。

近い将来、『和葉のいる日常』に戻れたならきつと、あの記憶も薄れていくだろうけれど。

聞き慣れたアナウンスが、到着を告げた。

人波に紛れるように電車を降り、改札を抜ける。

自分の影を追うようにアパートに向かいながら、ポケットに入れたままの左の拳に力を込めた。

一年目の七夕

「何や、コレ？」

隣から上がった小さな声に、危うく夢の中に落ちそうになっていた意識がふっとクリアになった。

ちなみに、今は講義中だ。

必修科目だから仕方なく出てるが、これがまた退屈で、気を抜くとつい寝ちまいそうになる。

午後の講義だったりするから、尚更に。

……って、まあそれは置いて、俺は頬杖ついたまま隣に目をやった。

隣に座ってるのは、服部。

いつもなら眠そうに……っつーか8割がた居眠りしてる服部が、訝しげに眉を寄せて携帯を見てる。

「どうした？」

「和葉からのメールなんやけどな……」

ため息つきながら、服部が俺に携帯を差し出した。

彼女からのメール見るなんて野暮だとは思うが、受け取った本人が見ろって言うんだから遠慮なく受け取る。

画面には、長方形の色紙いろがみが写った写真。

アドレスは確かに和葉ちゃんのものだが、件名も本文もなし。

「わかるか、工藤？」

「いや、さっぱり」

服部に携帯を返して、欠伸を噛み殺す。

写真だけのメールはどこか謎めいていて俺の好奇心を擽るが、送信したのが和葉ちゃんなら服部の担当だ。

俺の出る幕じゃねえし、首を突っ込むのはそれこそ野暮ってモンだろう。

服部が、携帯の画面を睨み付けるようにして考え込む。

写真だけのメールに込められた和葉ちゃんからのメッセージを、何とか読み取ろうとしてるんだろう。

他人から見れば特に意味もなさそうな何気ない小さな写真にしか見えねえだろうし、わかんねえなら本人に訊けよって思うだろう。

服部も、もしあのメールを送ってきたのが俺だったりしたら、速攻で訊いてくるはずだ。

だが、メールの送り主が服部が探偵だってイヤって程知ってる遠恋中の彼女なら、話は別だ。

あの写真には、間違いなく何かしらの服部に向けたメッセージが含まれている。

そのメッセージがどんなモンかは、わからねえけどな。

考え込んでる服部は放っておいて、俺も携帯を取り出した。

十年一日みてえな単調な授業は拷問だが、それももうすぐ終わる。

今日は蘭とのデートだし、たまには俺から確認のメールをするのもいいだろう。

蘭からのメールを読み返して、時間と場所を確認する。

今日は少し足を延ばして、有名な七夕祭りを見に行く予定だ。

……七夕？

メールを打とうとした指が止まった。

今日は7月7日、七夕。

七夕から連想されるものと言えば、牽牛と織女に天の川、笹には輪飾りと短冊。

……短冊。

あの写真って、もしかして短冊か？

「……なあ、服部」

多分、周りの音なんか聞こえてねえだろう服部の脇腹を小突く。

「何や？」

「今日、何の日かわかるか？」

声だけ返してきた服部に、それだけ言ってやる。

服部もすぐに気付いたらしい。

「だからって、何でコレなんや？」

ため息まじりに服部がぼやいた。

あの写真は短冊で間違いねえだろうが、和葉ちゃんがそれに何を託したのかは俺にはわからねえ。

まあ、俺には関係ねえ事だから、わからなくていいんだけどな。
受取人は服部だ。

がしがしと頭を掻く服部を無視して、蘭にメールを送る。

今の俺の最優先項目は、今日のデートだ。

メインは七夕祭りだが、今一つ天気がはっきりしねえし、雨のパターンも幾つか考えておくべきだよな。

きっちり仕入れておいた情報を、改めて頭の中で整理する。

うん、完璧だ。

流石は、俺。

見事なまでの『七夕デートプラン』だ。

よしよし、と満足感に浸った時、丁度授業が終わった。

「じゃあな、服部」

「おう。ドタキャンして姉ちゃんにフラれんなや？」

「オメーこそ、ソレちゃんと解読しろよ？」

軽い応酬をしながら、手早く荷物を纏めて教室を出る。

待ち合わせまではまだ時間はあるが、俺が蘭を待つのも一興だ。

俺は足取りも軽く、駅へと向かった。

服部がちゃんと和葉ちゃんからのメッセージを受け取れたかどうかは、月曜日のお楽しみだ。

二年目の七夕

『明日、午後にはそっちに帰る。久しぶりに七夕祭り行こうや』

そんなメールが来たのは、金曜日の朝。

イベント事にあんまり興味のない平次からの珍しい誘いのメールに浮かれて、その日の講義なんてさっぱり頭に入らなかった。

講義の後にお茶した友人たちからも『心ここにあらずやね』って言われたし、自分でもおかしいくらいに舞い上がった。

……だって、七夕に帰って来るなんて全然期待してなかったから。

いつもお茶の後で遊びに行こうって誘ってくれる友人たちとわかれて真っ直ぐに家に帰って、天気予報を横目で見ながら浴衣を選んで小物を並べて、やっぱり新しいの買っとけば良かったとちよつとだけ後悔して、それよりも髪型をどうしようかと悩みながら鏡の前に座ったら今度はお化粧が気になってありったけの口紅やらグロスやらを並べ始めて、何とか自分を納得させた時にはもうすぐ日付が変わろうとしていて。

それくらい楽しみにしてたのに……。

待ち合わせは4時。

家まで迎えに来てくれる約束だから時計とにらめっこしながらうきうきと仕度をして、さあ後は出掛けるだけって時に『事件。遅れる』ってメールが来た。

それからもう5時間。

時計の針は、9時を指そうとしている。

「シャワー浴びて着替えようかな……」

平次が誘ってくれた七夕祭りは有名所みたいに大きくはないけど、それでも結構華やかで賑わっていて、何度か一緒に見に行った所。家からそう遠くはないけれど、今からじゃお祭りには間に合わない。

小さくため息をついて結い上げた髪を解いたら、小さな赤い薬玉の帯飾りが揺れた。

これは、おとしの七夕祭りの時にねだって買ってもらったもの。鏡の中の泣きそうな自分に思いつき舌を出して、お風呂に向かった。

平次の性格は良く知ってるし、遅刻もドタキャンも慣れてる。

だけど、平気なワケじゃない。

いつだって、寂しさや哀しさや不安や、そんなマイナスの感情ばかりが心を占めて苦しくなる。

滅多に会えなくなった今は、特に。

「ホンマ、腹立つ！」

熱いシャワーを浴びながら、吐き捨てるように言ってみた。

声が震えてしまったけど、気が付かないフリをした。

去年、ちょっとした悪戯心で送った短冊の写メへの返事は、色違いの短冊の写メ。

『会いたい』って気持ちを乗せたメールだったから、もしかしたら同じ事を思ってくれたのかもしれないと、ちょっと嬉しくなった。

今年は平次から七夕祭りに行こうってメールをくれたから、余計に

期待した。

だから、いつもよりずっと寂しくなった。

牽牛と織女みたいに、1年に1度しか会えないワケじゃないのに。

「疲れたな……」

部屋着のまま、電気も点けずにベッドに横になる。

何かの糸が切れたみたいに、急に身体が重くなった。

今日はもう何もする事はないから、このまま眠ってしまおうか。

そう思ったら、パジャマに着替えるのも億劫になって、そのまま目を閉じた。

巾着に入れたままの携帯が何度か着信を告げたけど、聞こえなかった事にした。

翌朝、目が覚めて最初にした事は、アタシが寝てる間に勝手に人の部屋に侵入した犯人へのメール。

枕元にあった青い薬玉の帯飾りと短冊っていう手掛かりがあったから、犯人はすぐにわかった。

自首してくるなら、許してあげない事もない。
そんなに待てないけれど。

そんな気持ちに乗せて、短冊の写メを送った。

夏のお嬢さん

キンコンっていう、耳障りにはならねえがよく通るベルの音に、読んでた推理小説をテーブルに置いてドアに向かう。

見かけほど重くないドアを開けると、制服をきっちりと着こなした客室係の女性がにこやかに頭を下げた。

「ルームサービスをお持ちしました」

「ありがとうございます。じゃあ、こっちに」

「はい」

白いワゴンを押した客室係が手早く、けれど丁寧に、リビングのテーブルに飲み物と軽食を並べる。

差し出された伝票を確認してサインを入れて返すと、客室係はまた丁寧な礼をして下がって行った。

「お、旨そうやん」

客室係と入れ替わるように頭にタオル乗せたまんま風呂から出て来た服部が、綺麗に盛られたサンドイッチを彩っているプチトマトを1つ摘んで口に放り込んだ。

「フライングすんな」

「ええやん、1つくらい」

『完熟やな。旨いわ、コレ』などと言いながら、服部が濡れた髪をがしがしと拭く。

仕方ねえなとため息をついて、窓へと目をやった。

俺たちが今いるのは、沖縄のリゾートホテル。

オーシャンビューが自慢のこのホテルの、壁一面を占領してそんな程に大きな窓の向こうには、真っ白な夏雲の浮いた青い空と、それに負けないほどに青く輝く海が広がっている。

『夏休みには海に行きたい』

蘭からそうリクエストされたのは、夏休みも迫った7月初め。

日帰りのつもりだったらしいが、折角の夏休みなんだしと、和葉ちゃんたちを誘っての4泊5日の沖縄旅行を持ちかけた。

和葉ちゃんを誘ったのにはワケがある。

大学に入ってから週1度の俺の家への外泊は認めたものの、2人での旅行は絶対に許さないおっちゃんを説得するためだ。

俺や蘭がどんなに粘っても首を縦に振らないおっちゃんも、和葉ちゃんや園子といった良く知ってる女友達と一緒にだからと言うと渋々ながらOKする。

いくら女友達が一緒でも、その友達も彼氏連れなら結果はあんまり変わんねえと思うんだが、その辺が男親の複雑な所なんだろうな。ちょっと卑怯だが、今回もその手を使わせてもらったワケだ。

まあそれはおいといて、観光客で溢れるハイシーズンの沖縄だから俺や服部のツテでもさすがにホテルの手配には少々手間取って、本音を言えば2部屋欲しかった所が1部屋になっちゃって、蘭たちは喜んだけど俺たちは少しばかりの打ち合わせをする必要に迫られた。何のための打ち合わせかは、バレバレだろうが一応秘密だ。

それでも、少々値は張るもののリビングを挟んで2つのベッドルームがある、眺めのいいテラスのついた部屋を押えられたからよしって所だ。

「和葉たちは？まだテラスにおるんか？」

タオルをランドリーボックスに放り投げながら、服部も窓へと目を向ける。

テラスには、海に向かって並べられた白いキャンバス地の2脚のデッキチェア。

蘭と和葉ちゃんは、折角の沖縄だからリゾート気分を満喫するんだと言って、部屋に帰って来て風呂で潮を落として揃ってテラスに出て行ったままだ。

「姫君たちはまだリゾート気分満喫中らしいぜ？」

「要するに、疲れて寝とるってワケやな」

「そうとも言うか」

テラスは丁度いい具合に日陰になって、吹き抜ける風が心地良さそう。

デッキチェアに隠されて蘭たちの姿は俺からは見えないが、風に乱された髪を直そうともしないあたり、服部の言うように転寝でもしてるんだろう。

「起こしたるか」

「そうだな。折角のドリンクが温くなっちゃったらもったいないねえ」

ルームサービスなんてまた新たに頼めばいいだけの話だが、転寝してる蘭たちを起こすにはいい口実だ。

手櫛で髪を撫で付けてる服部と一緒に、テラスへと向かう。

折角の旅行、お楽しみはまだまだこれからだ。

『あたしたちはこっちの部屋使うから、新一たちはそっちの部屋ね』と早々に宣言されて出鼻を挫かれた俺たちが、彼女たちの睡眠が深いのをいい事にこっそり夜中に部屋割りを変更して翌朝彼女たちから平手を食らったのは、それも2日続けてだったりした事は、ここだけの話だ。

——隣で寝てただけで何もしてないのに、酷いと思わねえか？

二年目のハロウィン

『Trick or Treat?』

和葉からそんな件名の写メが届いたのは、日付が変わってすぐの事。そういえば今日はハロウィンだったなと思いつながら開いてみれば、オレンジ色のジャック・オ・ランタンの写真だけで、本文は何もなし。

そっちがそのつもりならと、手近にあったクッキーの写メを送り返した。

すかさず掛かってきた電話は、勿論和葉から。

『誰に貰ったん?』

通話ボタンを押すと同時に聞こえてきた声は、少しだけ尖ってる。多分、あのクッキーが手作りだと見抜いたんだろう。

『誰でもええやろ?』

『……ふうん、そうなんや』

オレの答えに急降下していく機嫌。

声しか聞こえていないのに、半眼で拳を握り締めている様子が浮かんできて、こっそり笑った。

『邪魔してゴメンな。じゃあ、クッキーの彼女によろしく』

ツンとした声は、それでも本気で怒ってるものじゃない。

「蘭ちゃんやで。工藤んトコ寄った時に会ってな、お裾分けや言う

て貰ったんや」

和葉の所にはとくに連絡が行ってるだろうが、今にも電話を切り
そんな雰囲気、オレの方から折れてやる。

『美味しいやろ？ 蘭ちゃんも会心の出来やって言うてたし、アタシ
も食べたかったな』

ついさっきまでの機嫌の悪さなどなかったかのように明るい、和葉
の声。

楽しみに話す声を聞きながら、書きかけのレポートはそのままに、
良く使う予約サイトを呼び出した。

いきなりの万単位の出費は少々痛い、こんな時のための蓄えくら
いは充分にあるし、自分のための投資と思えば安いもんだ。

「オマエ、明日……やなくて、もう今日か。何か予定あるんか？」

『え？ 特にないけど……』

「せやったら、名古屋、いつもの所に集合」

高校の頃は、ただの通過駅だった名古屋。

オレが東京に進学した今は、平日に会える数少ない場所の1つ。
ここからなら、始発を使えばお互いに朝一の講義にも間に合うから。

「明日始発に乗れるように、今からきっちり寝とけや」

殆ど定宿になりつつある駅前のビジネスホテルに予約を入れて、和
葉に返事を促す。

「返事は？」

『……うん、わかった』

「キャンセルはきかんで？」

『平次には言われたないわ』

ひとしきり軽口の応酬をして、通話を切る。

最後に聞こえた『おやすみ』の聲が嬉しそうだったのは、オレの気のせいじゃないはずだ。

三年目のハロウィン

『Trick or Treat?』

今日はハロウィン。

日付が変わると同時に、いつも忙しそうな探偵殿に、こんな件名でジャック・オ・ランタンみたいな顔をしたクツキーの写メを送ってみた。

それが1時間前の事。

普段はこの時間なら大抵はすぐに返事をくれるのに、今日はまだ返事が来ない。

さては探偵業に没頭してるなと眠ろうとしたら、珍しく工藤君からのメールが届いた。

工藤君とは友達だから別に不思議な事じゃないけど、アタシに直接メールしてくるなんて珍しい。

『至急』なんて件名だから、まさか蘭ちゃんに何かあったんじゃないかと慌ててメールを開いた。

『服部ダウン中。救援乞う。但し、授業は受けて来いよ』

こんなメール貰って、落ち着いてなんてられない。

こんな時間だからとか、もしかしたら蘭ちゃんと一緒かとか、そんな気遣いなんて出来なくて、気が付いたら工藤君に電話してた。

『ごめんごめん。心配いらないよ。最近レポートとか依頼とかが重なって疲れてた上にいきなり寒くなったから、ちよっと風邪気味らしいだけさ』

挨拶も何もしないいきなり『平次どうしたん?』なんて失礼な事言
ったアタシに、工藤君は笑ってそう答えてくれた。

『さっきまで服部と一緒にだったし、携帯は多分、充電が切れてるだ
けだろ。この週末は何の予定もないから寝てるって言ってたからさ、
和葉ちゃんの顔見れば一発で回復すんじゃないかねえかと思ってメールし
てみたんだ』

工藤君に、携帯の向こうから申し訳なさそうに『余計な事しちゃっ
たかな?』なんて言われて、アタシは思いつきり否定した。

『和葉ちゃんが来れるんなら、縛り付けてでも部屋に閉じ込めてお
くけど、どうする?』

工藤君の協力なら、あの平次でも絶対に大人しくしてるハズ。
そう言ったら、工藤君は面白そうに笑った。

『今日はハロウィーンだったよな? 服部がお菓子なんて用意してる
ワケねえし、思いつきりイタズラしてやれよ。但し、その結果につ
いては、俺は責任持てねえぜ?』

楽しげな工藤君の声に背中を押されるようにして東京行きを決めた
アタシは、通話を切るとお疲れの名探偵殿に改めてメールを送った。

『Trick or Treat?』

同じ件名のメール。

本文には、救急箱の写真。

今度はすぐに返事が来た。

『工藤に聞いたんか？風邪移したらオレが殺されそうやから、来なくてええわ』

そんな事言われたら、余計に心配になる。

欲しい物あったら持っていくからってメールの返事は、コレだった。

『ナース服はミニに限る』

思わず即行で電話して苦情申し立てをしたアタシに、携帯の向こうの平次は『予想通りすぎるわ』って大笑い。

元気そうな様子にほっとして、やっぱり来なくていいって言う平次の言葉は聞えないフリして、約束を取り付けた。

週明けになって何だか喉が痛くなったのは、気のせいって事にしておいた。

……何となく熱っぽかったのも。

クリスマス前の密かな悩み

「クリスマスの予定は？」

友人たちの間でそんな話題が出始めたのは、12月に入って間もない頃。

『彼氏とデート』と惚気る友人もいれば、まだ彼のいない友人は『これからが勝負よ！』と意気込んだり、他の友人は『サークルの仲間とパーティー』だったり、予定は色々だった。

「和葉はラブラブデートで決まりやろ？」

「どうやろ？」

「冬休みやし、彼氏、帰って来るんとかやうのん？」

「帰って来るつもりはあるみたいなんやけど、予定は未定で決定やないんが当たり前やし……」

大学近くのケーキが美味しい小さなカフェで、からかい混じりに聞いてくる友人たちを前に思わずため息をついてしまった。

『あの』平次に、友人たちが言うようなクリスマスを期待するのは無理だって、今までの経験からアタシは知ってる。

あの雑学で一杯な世間的には優秀だと言われる頭の中には、クリスマスだけじゃなくて女の子が好むイベントとかもデータとしては当然入ってるハズなのに、その部分だけ何故か回線が錆び付いてて中々情報が読み出せないらしい。

それでも、東京に進学してからはその回線の錆もいくらかマシになっってはきたけれど。

「期待せんとくわ」

期待した分だけ寂しくなるってわかってるのに、それでもやっぱり期待してしまうのが乙女心。

そんなアタシの気持ちなんてこの友人たちにはバレバレだろうなと思いつながら、それでも気にしてない風を装ってみる。

「そうや、先週梅田に出来たケーキ屋さん、知っとる？」

仕方ないなあと言うように苦笑した友人たちは、アタシがケーキを一口食べてる間にあっさりと次の話題に移っていた。

秋の二コマ(その1)

「紅葉を見に行きたいな」

先月のデートの時、ふと蘭がそう言ったので、この3連休は『2泊3日で優雅に紅葉狩り』に決定した。

下心アリの温泉付きだったのは、勿論蘭には秘密だ。

紅葉なんて自然現象が俺たちの都合に合わせてくれるハズもねえが、そこはそれ、俺の持つあらゆる情報網とコネを駆使すれば、『綺麗な紅葉と気の利いた温泉宿』をセッティングするのは、そう難しくない。

「来月の3連休でいいか？」

そう訊いた俺に、蘭は特上の笑顔で頷いてくれた。

『和葉ちゃんたちも誘おうよ』と言うオマケを付けて。

嬉しそうな笑顔で蘭にそう言われては俺には拒否出来るワケもなく、服部も加わって『可愛い彼女とその友達と行く紅葉狩りと温泉』はさらにセッティングが容易になり、実行の運びとなった。

東京駅の新幹線改札口は、いつもながら待ち合わせの人たちで結構賑わってた。

まあ、俺たちもその『待ち合わせの人たち』なんだが。

「あ！和葉ちゃん！」

蘭が声を上げて手を振る。

改札の向こうの和葉ちゃんも気付いたようで、改札を抜けるとばふんと蘭と抱き合った。

「久しぶりやね、蘭ちゃん！」

「久しぶり、和葉ちゃん！元気だった？」

「うん、蘭ちゃんは？」

きやいきやいと、挨拶だか近況報告だかしてた2人が、ふと俺たちに向き直った。

「平次も久しぶり」

「オレはついでかい！」

「服部君もまぜてあげようか？」

どこか不機嫌そうな服部に、蘭が悪戯っぽい笑みを見せた。

服部にしてみれば、久しぶりに会った恋人が真っ先に駆け寄って名前を呼んだのが蘭だったのが気に入らないんだろう。

そう言ったところで、こいつは絶対に認めねえだろうけどな。

「いや、遠慮しとくわ。オレまだ死にたないし」

服部が意味深な視線を俺に投げる。

確かに、蘭と和葉ちゃんの輪に服部が入って、たとえ間違っただとしても蘭に抱きついたりしやがったら、命の保障は出来ねえ。

俺の知識を総動員して、完全犯罪を実行してやる。

それはさておき、今回の旅行は秋の行楽シーズン真っ只中ってのも

あつて、渋滞するだろう車はやめて、最寄の駅まで電車で行く事になつてゐる。

お互いの彼女の荷物片手に、俺たちはお喋りの途切れない彼女たちと北へと向かう電車に乗り込んだ。

秋の一コマ(その2)

『紅葉が見たいな』

蘭のそんな一言で決まった、2泊3日の温泉旅行。

自然現象がそうそう俺の思い通りになる筈もないが、それでもツテを頼って紅葉が見頃の景色のいい温泉宿を手配した。

服部達が一緒に2人きりじゃないってのが唯一の不満だったが、蘭との旅行には和葉ちゃん存在は不可欠だし、ヤツとは利害関係も一致してるから、そんな不満を補って余りある夢のような小旅行になる……筈だった。

「どこで間違えたんだろうな？」

「そら、最初からやろ」

窓の外に広がる紅葉を遠い目で見遣る俺のやるせない気持ちを、まったりと茶なんか飲んでる服部がさっくりと切り捨てた。

ポーズなのか、それとも遠恋に慣れてどこか達観したのか、服部は俺と違って可愛い彼女とのアレコレについて期待だの焦りだのを微塵も見せずに、いつも平然としている。

まあ、ヤツは俺とは同類だから、飄々としてるのは表面だけの事だ。ってのは見当がついてるがな。

ちなみに、可愛い彼女たちは紅葉を見てくると言っ、旅館の見事な庭を散策中だ。

虚しさを胸に服部に向き直り、茶に手を伸ばした。
湯飲みの滑らかな肌触りとほわりとした温もりまでが可愛い彼女を
思い起こさせて、俺のテンションは落ちまくりだ。

「綺麗な紅葉に心地好い温泉に可愛い彼女とくれば、ヤル事は決まってるんだろ？」

「ここの旅館には『混浴』はないで？」

「それも落ち込みポイントだけだよ、まあ観光シーズン真っ只中に宿が取れたんだし、旅館の設備の問題なんだから仕方ねえって諦めもつく。けどな！」

「言いたい事はわからんでもないけどな、一部屋しか取れなかったんやし、これが二部屋やったとしても結果は大して違わんと思うで？」

「それでもな、こうこっそり起こしてだな……」

日常とは切り離された旅先という開放感に親友も一緒だというスパイスを振りかけたら、可愛い彼女はどんな反応をしてくれるか見てみたかったのが、俺の本音だ。

「……オメーだって期待してたんだろ？違うとは言わせねえぜ？」

「まあ、否定はせえへんけどな。せやけど、その後の反応考えたら実行に移すんはちよお躊躇うし、何より設定に無理があるわ」

「何だよ、無理って？」

「姉ちゃん、一度寝たら滅多な事や起きへんて前に言うてたやろ？せやったら、そもそも最初のこっそり起こすてあたりから無理やと思わんか？」

「俺とした事が……抜かった」

「工藤も姉ちゃんの事になると、詰めが甘いな」

ぱったりと机に突っ伏した俺を見て、服部は楽しそうに声を上げて笑う。

オメーには言われたくねえと思いつながら、突っ伏した姿勢のまま改めて窓の外に目をやった。

秋特有の高く澄んだ空に映える、鮮やかな紅葉。

散策に出ている彼女たちも、綺麗な落ち葉を土産にそろそろ戻って来るだろう。

昨日のうちに宿の人に頼んでおいた弁当も出来てる筈だし、女将さんがこっそり教えてくれた穴場で紅葉狩りと洒落込むのもいい。

「帰って来たみたいやで？」

服部のセリフに耳を澄ますと、微かに聞こえて来る軽やかな足音と話し声。

相変わらずいい耳してんなと内心こっそり舌を巻きながら、フロントに連絡するべく身体を起こした。

「まあ、こんな旅行もいいさ」

「いつも通りやんか」

「そうとも言うな」

『お荷物増やしてしまって申し訳ないんですけど』と言いながら、フロントの人はレジャーシートやブランケットを用意していると云ってくれたし、今日一日、綺麗な紅葉の下の艶やかな彼女たちを、目で堪能するとしよう。

俺の野望はまあ、こっちに置いておくさ。

手紙・1

何でそんな事をしようと思ったのか、自分でもわからない。ただ、何となくそうしたかった。

「1泊でツーリング行かねえ？」

田村にそう誘われたのは、ちらほらと花の便りが聞かれ始めた頃。コイツとは、たまたま大学の前で会った時に田村が乗ってたバイクを見て、東京のショップには不案内なオレが店を紹介してもらったって縁だが、バイクの趣味が近かったからか今では工藤とは違う意味で気の合う友人の1人だ。

「ちょっと早いけどさ、何とかって桜咲いてるとかTVで言ってたし」

「河津桜？」

「そうそれ！ショップ仲間がさ、安くていい宿知ってるって言うし、伊豆ぐるっとまわって桜見てさ、温泉1泊」

「温泉か、たまにはええなあ。いつものメンツか？」

「そう、お前入れて5人。いつも通り、女ッ気なしだけだな」

楽しげに笑う田村は純粹に走るのが好きなヤツで、バイクは好きだがツルんで走る趣味はないオレも、コイツの誘いには時々付き合ってる。

「後は、名探偵殿がお出ましになるような事件が起きない事を祈るぜ」

芝居がかった仕草で手を合わせる田村の祈りが通じたのか、事件も依頼も入る事なく迎えた当日は絶好のツーリング日和になった。

「野郎が集団で花見ってサムくねえ？」

「野郎同士で温泉の方が虚しいだろ」

「ここでナンパしたら、彼女にチクるぜ？」

他愛のない事で笑いながらのツーリングは、珍しい1泊だって事もあってか普段は滅多に話さない彼女談義に纏れ込んだ挙句に、調子に乗って『土産を買うぞ！』と観光地に寄り道しながらのどこかゆったりした雰囲気のままに解散となった。

そして今、オレの手元には小さな包みがある。

カラフルな薄い紙袋に入っているのは、金色の四角い金属片に模様が透かし彫りされた、観光地土産によくある葉。

彼女にと可愛らしい小物を選んでいるツーリング仲間たちには色気が足りないとかからかわれたが、桜の模様を見た瞬間にこれしかないと思った。

出先で土産を買うなんて、今のオレにはそう珍しい事じゃない。いつもと違ったのは、この先。

テーブルに広がる、白い便箋と封筒。

土産なんていつものように会った時に渡せばいいし、ツーリングに行って来たなんてメールで充分だ。

なのに何故か、ペンを握っている。

自分でも何がしたいのかわからないまま、封筒を引き寄せた。

『遠山和葉様』

文字として封筒の上で澄ましたように収まっている名前は、よく知
っているものなのに何故か見知らぬ他人のように思えて、心が騒い
だ。

手紙・2

郵便受けに配達されていた、何の変哲もない白い封筒。それを見つけた時、アタシの周りだけ時間が止まったような気がした。

大学から帰っていつものように郵便受けを開けると、夕刊の他にチラシが数枚と白い封筒が入ってた。

最近友人とはメールが主だから手紙が届くとしたら殆どがお父ちゃん宛てで、それも仕事関係で知り合った人たちからのものが時々届くくらい。

これもそうだろうなと思って玄関を上がりながら何気なく宛名を見たら、そこにはアタシの名前。

流れのままに差出人を見て思わず固まったアタシを、携帯の着メロが現実に取り戻してくれた。

「ゴメン、パス！」

友人からの遊びの誘いを速攻で断りながら自分の部屋に駆け込むと、足から力が抜けて崩れるようにへたりと座ってしまった。

深呼吸をして、改めて封筒を見る。

白い封筒の表には『遠山和葉様』
裏側の差出人には『服部平次』

何度見直してもその文字は消えることはなくて、やっとこれが錯覚でも何でもないんだってわかって凄く嬉しくて、知らず知らずのうちに頬が緩んだ。

でも、穴が開きそうな勢いで封筒を見つめていたら、今度は何故か不安になってきた。

だって、平次から手紙を貰ったなんて、アタシの記憶には殆どないから。

「アタシ、何かしたんかな……？」

ちっちゃい時から姉弟みたいに育って来たから、文字を覚え始めた頃に嬉しくて画用紙に書いた手紙とも言えないような落書きを、それこそ毎日のようにお互いの家の郵便受けに入れあったりはしたけれど、そんな子供らしい熱が冷めてからは精々が年賀状くらいで、それだって携帯を持つようになってからは止まった。

勿論、平次が東京の大学に行ってからだってそれは変わってないから、段々とこの封筒が凄く特別で重要なものになってきて、すうつと指先が冷えてくる。

嬉しい気持ちと不安な気持ちと、両極端に騒ぐ心を静めるためにもう1度深呼吸をして、放り出したままの夕刊やチラシやバッグもそのままに引き出しから鋏を取り出した。

封筒に入っていたのは、便箋が2枚と小さな紙包みが1つ。

見慣れた文字の短い手紙を覚えてしまうくらいに読み返して、包みを開けた。

「ややこしい事せんといてよ……」

思わず滲んだ涙を誤魔化すように心にもない悪態をついて、携帯を

入れたままのバッグを引き寄せる。

『お土産ありがとう』と件名を入れた所で、ふと指が止まった。

2枚入っていた便箋のうちの1枚は白いまま、もう1枚もほんの数行しか書かれていないのに、こんなにも嬉しい。

それを伝えるのには、メールじゃ何だか足りないような気がする。でも、手紙って何を書いたらいいんだろう？

その前に、便箋と封筒！

白い便箋と封筒じゃ味気ないし、かといってあんまりファンシーなのじゃ引かれちゃうかもしれない。

コンビニじゃダメだし、今からでお店開いてるかな？

『服部平次様』

ドキドキと高鳴る鼓動を抑えながら宛名を書き終えたのは、平次からの手紙を貰った3日後。

知ってる限りのお店を回ってようやく決めた封筒3枚と便箋2冊を犠牲にしてからだった。

手紙・3

和葉宛ての手紙を投函したのは月曜の朝、大学近くの郵便局前のポストだった。

それからもう5日、和葉からはメールすら来ていない。

順調にいけば翌日、遅くとも水曜日には届いているハズだし、和葉の事だから届いたなら必ず連絡して来ると思っていたのに。

まさか、郵便事故にでもあって届いていないとか？

ありえない話じゃないが、だからといってわざわざ『届いたか？』なんて訊くのも躊躇ってしまう。

中身といっても、たかだか数行の事後報告メモみたいな手紙といつても手に入れられる安い観光地土産だけで、大して重要なものじゃないし。

けれど、我ながらおかしいくらいに和葉からの反応を心待ちにしている。

いつもなら軽い調子で土産を渡して、嬉しそうに笑う和葉にさらっと出掛けた時の話をして終わる事なのに。

それはきつと、手紙になどしてしまったからだ。

子供の頃のお遊びや年賀状以外に、改めて和葉宛ての手紙を書いた事なんて今までなかったし、何よりオレのキャラじゃない。

わかっているのに、何を血迷ってしまったのか。

そう言えば、記憶を辿ってみても和葉から手紙を貰った覚えは殆どない。

もしかしたら、それで和葉が引いてるとか？

いや、実際手紙って言うより事務連絡というかメモ書きだったから、

返事が必要だとは思ってないんだろう、きっと。
だから、今度会った時に何気に確認すればいい。
次に会えるのは多分、1ヶ月くらい先になると思うけれど。

「心ここにあらずだな」

「は？」

「時々、集中力が途切れてんだろ。ほんの一瞬だけどな、呆けてるぜ？」

助っ人に行った現場で工藤に指摘されて、ほんの少し動揺した。

「何悩んでんのか知んねえが、事件を前にしたら猪突猛進一直線のお前にしちゃ、珍しいじゃん」

「『猪突猛進一直線』ってあたりは工藤も一緒やん。その結果がアレやったんやし」

「古傷を抉るんじゃないよ。まあ、お前の事だから、悩みって言っても最近和葉ちゃんに会えなくて欲求不満ってあたりなんだろ？ ケンカでもしたんなら、さっさと謝って仲直りしとけ」

「随分な言いようやんけ」

「和葉ちゃん関連以外にお前の悩みがあるとは思えねえけどな」

「世界経済とかこの国の将来とか、オレの悩みの種は尽きんのや」

「言ってる。ま、何にせよ、現場で隙作ると足元掬われるぜ？」

言葉は悪いが、工藤はどこか落ち着きのないオレを見抜いて心配してくれている。

それは有難いんだが、原因を知ったらきつと、工藤は呆れたようなため息とからかうような冷笑を寄越すだろう。

それくらい下らない事だし、メールなり電話なりであっさり解決する事なんだと自分に言い聞かせても、どうしても行動には移せない。

ループする思考を持て余してウダウダと時間を浪費するなんて、まったくオレらしくもない。

自分で自分を蹴飛ばすように気合を入れてみても、和葉に関してだけは妙にヤワな心は萎縮するばかりだ。

こんな事で、自分の性格の一端をしみじみと再確認するとは思わなかった。

「ん？」

明けて月曜日、何の予定もなく気分も落ち込み気味だったオレは、悪友たちの誘いも適当に受け流してさっさと大学を後にした。

いっそのことアウトドア派を返上して、部屋に閉じ籠って思う存分落ち込んでみるのも新鮮でいいだろうなんて後ろ向きの積極さを引き出しながら、いつもの習慣で階段横の集合ポストを覗く。

請求書の時期以外は大抵が空で、時折チラシが入るくらいでDMすら滅多にないポストの底に、封筒の端が見えた。

薄暗いポストの中ではよくわからないが、請求書やDMにしてはサイズも質感も違う封筒。

どくん、と鼓動が跳ねる。

過剰な期待はするなと頭の片隅で繰り返しながら、ダイヤル式のキーを開けた。

『服部平次様』

狭いポストの中、ひっそりと慎ましく待っていた淡い桜色の封筒には、他の誰でもないオレの名前が柔らかな文字で記されていた。

この感動をどう表現したらいいのか。

言葉にすれば『嬉しい』としか出て来ない自分の語彙の貧弱さにがっかりするが、知らず知らずのうちに頬が緩んでくるのが答えだと

開き直ってみてもいい。

オレが借りている单身者向けのこのマンションは、まだ明るいこの時間には管理人以外には人影もなく静まり返っている。

時には冷たく思えるこの状況が、今のオレには凄く有難い。

ポストの前で、いかにも女性が使うものだろう色合いの封筒持ったままニヤけてるオトコなんて、誰かに見られでもしたら即警察に通報クラスの不審者だ。

何に警戒する必要があるのか自分でもわからないまま、そうっとなるべく音を立てないようにポストを閉めて、視線だけで辺りを探る。別に自分宛ての郵便を取り出したただけなんだから隠れなくてもいいのに、誰にも見られていなかった事にほっと息をついて、足早に部屋に帰った。

和葉に手紙を出して、1週間。

和葉からの連絡を待って、1週間。

そう言えば、特に用があるわけでもないのに毎日のように交わしていたメールも電話も、この1週間1度もなかった。

オレから出した手紙の事など無視して、いつものように学食がマズいだの課題がめんどいだのと話を振れば、和葉だっていつも通りに返してくれただろうに。

そんな事にも気付かずにいる自分が、心底情けない。

けれど、手紙を出して、こうして返事を受け取って、何となくわかった事がある。

メール、特に携帯でのメールは会話に近い。

一方で、手紙は包み込まれた気持ちの集まりのような感じと言えばいいのだろうか。

上手く説明出来ないのがもどかしいが、同じ文字での遣り取り、文字に込めた気持ちも変わらないハズなのに、メールと手紙ではやっぱり違う。

どっちがいいと言う事ではなくて、どちらもが必要で大切な手段。メールや電話に慣れすぎて、それを知らずにいたのが悔やまれる。それとも、今だからこそ、こんな気持ちになったのか？

「……まだ間に合うやんな」

和葉からの手紙が、凄く嬉しい。

改めて伝えるのは面映いから、その気持ちを乗せて時折さり気なく手紙を出してみようと思う。

きつと和葉は、また返事をくれるだろうから。

ペン立てから鋏を取り上げて、中身を傷つけないように慎重に封を開ける。

封筒とお揃いらしい淡い桜色の地に白く花びらが舞っている便箋が和葉らしいと、こっそりと笑った。

手紙・4

「おやすみ」

通話が切れるのを待って、アタシも携帯を切った。

そのまますぐに『寝坊したらアカンよ』とメールを送ると、すかさず返ってくる『講義中に居眠りすんなや』ってメール。

アタシが平次との電話を自分から切れないのも、おやすみって言うておきながらまたメールするのも、いつもの事。

終わりに送るメールは『寝坊したらアカンよ』が多いけど『ちゃんとゴハン食べてや』だったり『飲みすぎ禁止』になったり、返ってくるメールも『居眠りすんなや』が定番だけど『ハラ出して寝んなや』だったり『夜更かしは早く老けるで』になったり。

本当に些細な短文メールだけど、最初は送るのもドキドキで、すぐに返って来たメールが嬉しくて、浮かれてメール画面開いたまま携帯抱き締めて寝ちゃった事もあった。

翌朝、ほっぺたにストラップの跡がついててどうしようかと思ったけどすぐに消えてくれたから、若さって素晴らしいなんて鏡に向かってちよっと痛い勝利宣言してみたりした。

さすがに今は携帯抱き締めたままなんてないけど、寝るまでに何回も見直しながらこっさりツツコミ入れるのがお決まりのパターンになっている。

「居眠りしとるんはアンタの方やろ？ 証拠は挙がってるで？」

この情報の出所は工藤君。

いつもは蘭ちゃん経由なのに珍しく工藤君から直接届いた写メにちよっと驚いて開いてみたら、机に突っ伏して惰眠を貪っている平次が写ってた。

何でこんな写メが来たかって言うと、最初に平次が蘭ちゃんから『大学での新一ってどんな感じなの？』って訊かれて講義中に居眠りしてた工藤君の写メを送ったから。

それを知った工藤君からの報復って事らしい。

『どっちもどっちやんなあ』と蘭ちゃんと笑いあったのは、大学生活に慣れてやっと余裕が出て来た頃だったから、もう随分と前の事だけ。

携帯を充電器に置いて、枕元の本を引き寄せる。

これは最近加わった習慣で、文庫本より一回り大きい風景写真集に挟んであるのは、桜の透かし彫りが入った栞と雪山の絵葉書。

『依頼人の所からの帰りに寄った道の駅で見つけた。うまそうなジヤムもあったから、そっちは俺が喰つとく。平次』

もう何度も読み返した文字を目で追って、そうっと本を閉じた。

新しく宝物になった絵葉書は一昨日届いたものだけど、アタシも平次も電話やメールでは一言も触れてない。

平次が何も言わないのは多分、アタシが話題に出さないからだと思う。

何がどうって言えないんだけど、何となく別にしておきたいって気持ちがあって話せないだけなんだけ。

平次からお土産の栞と一緒に貰った手紙に3日かけて返事を書いてもう着いたかなとドキドキしながらカレンダーを見続けていたら、最後に電話とメールをしたのが10日も前だって突然気が付いた時には思わず我が目を疑った。

それまでは、電話しない日はよくあったけどメールはそれこそ毎日のようにしてたから、こんなに間が空いてしまうと何を話したらいいのかわからなかったし、今更『手紙着いた？』なんて訊けないし

どうしようと思っていたら、平次から『課題が重なって寝不足』なんて今まで通りのメールが届いてほっとした。

それからはいつも通りの遣り取りに戻ったけど、お互いに手紙の事は触れないままでもしかして日常語りばかりの取り留めのない手紙に呆れられたかもって不安になった時に届いたのが、あの絵葉書。

雪山の絵葉書が運んでくれたのは、前にも増した嬉しさときめきと、気負わなくていいんだって安心感だった。

今、アタシと平次を繋いでくれているのは、電話とメールと手紙。どれがなくなってもすごく淋しいけど、手紙を送るなんて離れて暮らしている今だからこそ出来た事だと思うから、沢山書いておきたい。

「今度は何にしよう？」

返事は急がない方がいいのかな？

それとも、一言日記みたいに毎日送りつけてみようか？

アタシも大阪人だし、たまには笑いも取らなきゃいけないよね？

封の所に招き猫のシールとかどうだろう？

それとも、コテコテの大阪っぽいものもいいかな？

今までだってアタシは平次の事ばかり考えてたけど、今は手紙を通してもっともっと平次の事を考えてる。

どうしようもないくらいに。

「ええやん、別に……」

誰にともなく言い訳して、ベッドに潜り込んだ。

手紙・5

和葉と手紙のやりとりをするようになって、もうすぐ半年がたつ。やりとりと言っても1、2ヶ月に1度往復するくらいで、まだ片手で足りる程度だが。

内容は本当に他愛もない事ばかり。

オレから送るのは大抵が出先で見つけた絵葉書に一言添えただけのものだったりするが、和葉はオレよりずっとマメで、どこで探してくるのか見た目にも楽しいレターセットを色々選んで、日常のあれこれを綴ってくれる。

勿論、メールや電話はそれこそ毎日のようにしているし時折は会ったりもするけれど、手紙はまた別物。

何と言ったらいいいのか、文字の中にぎゅっと凝縮した時間が閉じ込められているような、あるいは時間を止めて切り取ったような、どこかすぐたたくて温かな不思議な感覚がそこにあるように思う。それが心地好くて止められないんだが、だからこそ照れが先立ってそう頻繁には出せずにいたりする。

感情っていうのは中々に厄介なモンだと苦笑しながらも、それすら楽しんでる自分が結構気に入っている。

「バイト掛け持ちの上に事件連荘は、さすがのオレでもキツイわ……」

白々と明けてきた夏空を見上げて、眠気を訴える頭を起こそうと一つ深呼吸をする。

『家まで送るよ』と言ってくれた面倒見のいい馴染みの刑事の好意がなかったら、多分今頃電車の中で爆睡して見知らぬ何処かへ向か

っていただろうってくらいに頭が寝てるから、気を抜いたらきつとこのままマンションの入り口で行き倒れてしまおうだろう。さすがにそんな醜態晒すのはオレのプライドが許さないと、ふらふらと階段を上って気合で何とか部屋に辿り付いた。鍵を掛けて靴を脱いだ瞬間に意識が途切れて、気が付いたら蒸し暑い部屋の中汗だけで床で寝てたのはご愛嬌だ。

「よう寝たなあ……」

床からベッドに移動してそのまま惰眠を貪って、すっきり起きた時にはもう夕方だった。

疲れてたってのもあるが、ここぞとばかりに集中して入れていた短期バイトも今日って言うか昨夜で一段落したから、気が抜けたってのもあるんだろう。

床を見ると、脱ぎ散らかした服に交じって空になったスポーツドリンクのペットボトルが2本ばかり転がっていたから、無意識のうちに飲んでたらしい。

何故かエアコンまで入れてあつて部屋は快適温度になってるし、人間てのは不思議なモンだ。

「……ん？何やあつたっけか？」

ふと、頭の隅に何かが引っ掛かった気がするが、それよりも汗の跡が気持ち悪い。

何か忘れてるなと思いながらシャワー浴びてさっぱりしたら、いきなり空腹だったのを思い出してまずはメシが先と冷蔵庫と冷凍庫漁って一息ついて、やっとその『何か』を思い出した。

慌てて辺りを見回す。

部屋に入った時に持ってたのは間違いないと思うんだが、イマイチはつきりしない。

まさか、疲れた頭と願望が生み出した幻だったとか都合のいい夢だったとかって事はないと思う……と言うか思いたい。

わたわたと広くもない部屋を探し回って、やっと1度見たハズのタオルケットの下からそれは出て来た。

夏の海の波打ち際を思わせる爽やかな青のグラデーシヨンの地に、白く浮き上がるように散りばめられた貝殻の絵柄の封筒。

タオルケットに挟まれて角が少し折れてしまった封筒をしげしげと眺めながら、この半年で習慣になったポストの確認をあんな半分眠ってるような回っていない頭でも無意識のうちにしていた事に、我ながら呆れ半分にちよつと感動した。

鋏で丁寧に封を切って、便箋を広げる。

封筒とお揃いの便箋に記されているのは、楽しげな日常とこの後への期待。

今年の夏休みは前半はバイト三昧だと宣言して、和葉とは後半に遊び倒そうと約束してる。

まずは、和葉のリクエストでラベンダー畑を見に北海道旅行。

それからオレの部屋を拠点に遊びまわって、時間が許す限りぎりぎりまで一緒にいて……。

そこまで考えて、不意に押さえ切れない衝動を感じた。

ざわりと心の奥底から湧き出してくるこの感情は、劣情と似ているように感じてまた違うもの。

とうに知っているもののなのに、一体どう表現したらいいかわからなくてもどかしい。

他の事柄なら説明するのは苦手じゃないが、こと恋愛方面に関しては貧困な語彙に眩暈すらしそうだ。

だけど、このひたひたと満ちてくる感情を丸ごと文字にして和葉に伝えたい。

今を逃したらもう一生書けないと、それだけは妙に自信があったりするから。

白い便箋を前に一晚悩んで、やっと書いたのはたった4文字。

工藤あたりに言わせれば『なっちゃいねえ』って事になるんだろうが、もったいぶった言い回しも齒の浮くような修飾もオレには似合わないし、和葉もきつと好まない……と思う。

だから、照れも誤魔化しもなくストレートに、この気持ちを綴った。

それがこれしか思いつかなかったって言うのは、和葉には内緒にしておこうと思うが。

何の飾り気もない真っ白い封筒に、たった4文字だけ書いた便箋を入れる。

『遠山和葉様』

封筒に収まった宛名が妙に畏まって見えるのは、きっとオレの気持ちのせいだろう。

けれど、それも仕方がない。

何しろこれがオレの人生最初の、そして多分最後になるだろう、和葉宛ての恋文だから。

和葉からの2文字だけの返事がオレの元に届いたのは、夏の名残の

風に秋の気配が色濃く混じり始めた頃。

その2文字を包み込むようにして届けてくれた淡い桜色の便箋は、オレの名前が記された封筒と共に永遠の宝物になった。

手紙・その影にて

服部の様子がおかしい。

ヤツは直情型に見えて実は結構腹黒いポーカーフェイス野郎だから、多分気付いてるのは俺一人だと思うが。

「最近、随分とご機嫌じゃねえか」

「まあな。面倒な課題は終わったし、世の中それなりに平和やし、機嫌もようなるやん？」

心ここにあらずって顔で呆けてたヤツがいきなり妙に上機嫌になったと思ったら、それ以来ずっと今度は別の意味で心ここにあらずとばかりに浮かれてる。

まあ、これも俺だけがわかった事だけだな。

それはともかく、何となく気になってたから取り合えず直球で勝負してみたらさらっと流されて、原因は和葉ちゃんだと確信。

ヤツの事だから、さては和葉ちゃん不足に耐えられなくなって一晩で大阪往復でもしたのかと思ったが、1限の講義にはいつも通りに出てたからその可能性は極めて低い。

いや、高速バス使うとか本気で時刻表トリックやろうとか思えば何とかなるだろうが、ヤツならそんな無駄手間と時間使うくらいなら講義フケて彼女と一緒にいる方を選ぶだろう。

「ま、そう言う事にしといてやるよ」

謎があれば知りたいってのは人情で、探偵なんてやってればその欲求は人一倍。

ましてや、このわかりやすいようにいて掴めねえ親友の事ならなお

さらだ。

いや、別に弱み握ってやろうとかからかうネタが欲しいとか、そう言う事じゃねえぜ？

様子のおかしい服部が、純粹に心配なだけだ。

何せ、俺はヤツの『大親友』だからな。

何はともあれ、探偵の基本は観察と調査。

あの服部がそう簡単に尻尾を出すとは思えねえが、この俺の能力を持ってすればそう難しくはねえ……ハズだ。

いや、相手はあの服部だしさ。

とにかく油断は大敵だが、きっちりすっきりさっぱりと、この謎解いてみせるさ。

「どうしたもんかな……」

ベッドに寝転んで大きなため息をつく。

俺の右手には、菜の花の写真の絵葉書が1枚。

この俺の頭脳を持ってしても手掛かりすら中々掴めなかった謎は、服部の部屋に行った時にちょっとした偶然からするりと解けた。

俺の推理に間違いはねえだろうが、一応状況証拠だけじゃなくて子供も引き出そうと、宥めたりすかしたりカマかけたり追い詰めたり、散々ネチネチとヤツを突付いたら、とうとう服部は逆切れ気味に吐いた。

その結果に満足して今度はそのネタで散々にヤツをからかって、謎

解き後の清しい気分で帰ろうとした俺を呼び止めた服部にいい気分で振り向いた時に目の前に広がった、鮮やかな菜の花の写真。

「ソレ、やるわ」

「写真？」

「この前、千葉に行ったやん？ そん時買ったんやけどな、余つとるからやるわ」

一見人懐っこいけど妙に迫力のある笑顔の服部に押されて勢いで受け取ったら、そのままぽいって感じで追い出された。

まあ、用件は終わってるし帰るつもりだったから不都合はなかったが、困ったのが持たされた絵葉書。

服部が言いたい事は何となくわかる。

俺もこっそりと羨ましいなんて思ったしな。

だからって、俺に出来るかって言えばとてもじゃねえが無理だ。

だってよ、そりゃ毎日じゃねえけどちよくちよく会ってるし、週末には大抵泊まりに来るし、手紙出すより直接行った方が早いってか近いし……。

「どうしたもんかな……」

もう一度大きく息をついて、絵葉書をテキストに挟んだ。

寝不足のまま行った大学で、服部から『心ここにあらずやな』と訳知り顔で笑われたのは、翌日の事だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7282k/>

眼鏡＜短編集＞

2010年10月10日10時55分発行